農都共生研究会
Agricultural laboratory

地域の資本を活かして、日本をもっと元気に、北海道をもっと明るくすることを目的としています。全国各地の地域づくりの成功例を調査し、農村と都市の共に繁栄するあり方を研究しています。さらに農村と都市の共生と交流の促進を提言し、各地の地域振興の具体的な組織と連携し、各種事業を実践します。

■活動内容

研究会は次の活動を行う。

① 多様な活動主体の取組活発化に向けた活動
② 地域住民への普及・啓発に向けた活動
③ 農村と都市の共生と交流推進方策の検討
④ 農都共生に関わるビジネスプランの検討
⑤ その他研究会の目的を達成するために必要な活動

2011年度 活動報告

4月24日 由仁町みたむら農園「籾（もみ）まき」援農

研究会メンバー5名にて、籾まきのお手伝い。
パレットへの籾まきからビニールハウスまで一連の作業を担当。

5月〜 農商工連携人材育成事業
［北海道中小企業診断士会主催］

農商工連携について学びつつ、農産物生産者、食品加工業者および販売業者・飲食業者の研修を実施。実行委員として当研究会から4名が参加。

7月16日 富良野イマイカツミ農園「アスパラガス」援農

富良野在住の半農半画家イマイカツミ氏が一昨年購入した農家の畑へアスパラの苗植えと畝づくりのお手伝い。

7月23日 由仁町みたむら農園「トマトの収穫」援農

ビニールハウス内のミニトマトの手入れと収穫。支柱への紐の結び方など合理的、効率的な農作業の知恵を再認識。

7月30日 ワークショップ「夏のクロスポイント」開催

8月 27〜30日 慶應義塾大学大学院SDM研究科 アグリゼミ東北視察

10月〜 札幌6次産業活性化推進事業

道内の1次産業者と、札幌市内の2次、3次産業者が対等な関係で連携し、新商品開発等を行う事業における参画。

11月5日 ワークショップ「秋のクロスポイント」開催

2012年 3月 報告書発行

Pickup

笑顔が満ち溢れる 未来の農業のために。

「深く、クロス」することを目的として開催された、2011夏と秋ののクロスポイントは生産者、行政、加工業者、飲食業、コンサルタント、学生など多業種の方たちに参加をしていただくことができました。

夏のワークショップは「マルシェ」「農産物」「グリーンツーリズム」「加工品」「アグリビジネス」「食農教育」と6プランのテーマに分かれ、事前に「○○なマルシェ」「○○な農産物」と各テーマのタイトルを決めそれに沿って活発な議論が展開されました。「食農教育」のワークショップでは「家庭に笑顔が満ちる食農教育」。食農教育から北海道の未来を考える議論が交わされました。

秋には、夏のクロスポイントから生まれたストーリーをさらにブラッシュアップし「笑顔が満ち溢れる『農産品』『食農教育』『グリーンツーリズム』」。それぞれのテーマを2つのテーブルに分け、各テーブル7〜8名のグループによりワークショップを展開いたしました。『農産品』のグループでは乳業メーカー参加者が開発中の自社商品を持ち込み、試食をもとに「価格」「販売先」「プロモーション」などの具体的なコンテンツを目指すことをテーマに議論をされました。

この繋がりをさらに深め、クロスポイントがきっかけとなり、北海道を代表する魅力ある商品開発に結びつき、持続可能な農業のための一助になるよう農都共生研究会は今後も活動を続けてまいります。

活動内容や掲載記事など、詳しくはホームページをご覧ください。 http://www.noutokyousei.jp/ 農都共生研究会 検索

SDM System Design and Management
http://www.sdm.keio.ac.jp

■お問合わせ
慶應義塾大学大学院 システムデザイン・マネジメント研究科
［日吉学生部SDM担当］
〒223-8526 横浜市港北区日吉4-1-1 協生館2階
TEL 045-564-2518 FAX 045-562-3502
E-mail sdm@info.keio.ac.jp

農林中央金庫の寄付講座により発行しています

2012年は国際協同組合年であり、本講座は国際協同組合年（IYC）全国実行委員会より後援を受けています

2012 国際協同組合年

■2012年3月発行
発 行／ 慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科、農都共生研究会
企画・制作／東海林商事株式会社［農都共生研究会事務局］ 〒060-0807 札幌市北区北7条西2丁目 37山京ビル1F寿郎社内 TEL 011-708-8565 FAX 011-708-8566

AGRILAB REPORT

Keio University 1858 CLARIOR GLADIO FORTIOR

農都共生ラボ活動報告書 2011−2012

共通の方法論を学び、多視点で議論する場であること。

慶應SDMの「アグリゼミ」

3泊4日で東北視察

アグリゼミ学生レポート『Next leader from AGRI semi』／農都共生研究会

SDM System Design and Management

共通の方法論を学び、多視点で議論する場であること。

対談

慶應義塾大学大学院SDM研究科
委員長・教授／農都共生ラボ担当

慶應義塾大学大学院SDM研究科
特任教授／農都共生ラボ担当

前野隆司 × 林美香子

「エネルギーと農業」「農村と地域活性化」など、農業単体の関心だけではなく、
農村と都市の共生により広く日本を元気にしていきたいという
幅広い視点で地域活性化を考える。

前野隆司
Takashi MAENO

慶應義塾大学大学院SDM研究科
委員長・教授／農都共生ラボ担当

キヤノン(株)、カリフォルニア大学バークレー校Visiting Industrial Fellow、ハーバード大学客員教授、慶應義塾大学理工学部教授を経て現職。2011年4月より慶應義塾大学大学院SDM研究科委員長就任

■研究テーマ／システムデザイン理論・方法論、人間社会システムデザイン、技術システムデザイン など
■著書／『錯覚する脳』『脳はなぜ「心」を作ったのか』『思考脳力のつくり方』 ほか

林美香子
Mikako HAYASHI

慶應義塾大学大学院SDM研究科
特任教授／農都共生ラボ担当
農都共生研究会会長

北海道大学農学部卒業後、札幌テレビ放送アナウンサーを経て独立。農業、環境、地域づくりなどのフォーラムに、パネラー・講師・コーディネーターとして参加。北海道大学工学部社会人博士課程において、「農村と都市の共生による地域再生」の研究をし、博士(工学),Ph.D、取得。ホクレン員外監事

■研究テーマ／持続可能な農業、農村と都市の共生による地域再生、食と農による地域づくり など
■著書／『農都共生のヒント』『農村へ出かけよう』 ほか

SDMの可能性とさらに広がるアグリゼミ

林先生（以下林）　2008年にオープンをしたSDM。その中でアグリゼミは農業や農村、地域活性を考えるゼミとしてスタートしました。

各学生はそれぞれ専任の先生たちの研究室に所属してゼミに参加していますが、アグリゼミは、私が札幌在住ということもあって、月に一回程度、横断的なゼミとして実施しています。縦軸である研究室のゼミを補完するような横軸として活動していけたらいいなと思っています。

SDMも4年目でいろいろな変化が出てきましたね。

前野先生（以下前野）　成果が出始めてきたというのが嬉しい点です。変化という意味では、専門分野がなんであれ、幅広い視点から物事を捉える研究が増えてきました。

たとえば農業の人は農業を、地域活性化であれば地域行政について徹底的に研究している人達が、それぞれの専門性を持って幅広く共同で考えることによって、単なる縦割り型の研究成果ではなく、世の中で本当に役立つ成果を出していく、という狙いが浸透してきました。

同時に、農業、地域、技術等の専門家が同じ言葉で議論をし、それぞれが影響を及ぼしあうことによって、関連しているすべてのみなさんが成長してより良い世界作りに広がっていきつつあります。そこが我々研究科の強みであると考えています。

林　学生がどこの分野に興味を持つかによって研究対象も変わっていきますよね。

前野　そこが面白いところです。農業と地域活性化の研究をしている人もいるし、都会での農業の研究をしている人もいる。世の中の必要性に応じて必要な方向にどんどんアメーバーのように広がっていく。これがアグリゼミのおもしろさであり、SDMのおもしろさです。

【ゼミの様子】個性的な発想と議論が飛び交う

林　特に4年目である今年は、正にアメーバー的に思いがけないほど広がった年でした。例えば二人の都会出身の学生が都市農業に興味があるということで、5月に練馬の白石農園をお訪ねして、良い聞き取り調査をすることができました。また社会人の学生が「奇跡のリンゴ」で有名な木村秋則さんの自然栽培法に興味を持ち、木村式自然栽培法と耕作放棄地と中高年失業者の問題を一気に解決しようという非常にダイナミックな考え方で研究を進めたことで、私達も木村さんと繋がりができました。4年前とは違う広がりを感じます。

前野　農業と中高年失業者を繋げるというのは意外でした。地域活性化や過疎化を阻止してやりがいのある地域を作る。そういう二つ以上の問題意識を繋げていくということがおもしろい発展になっています。

林　地域活性化に関心のある学生が増えてきたのもとても嬉しいことです。また、木村さんとの出会いをきっかけに、慶應日吉に自然栽培農園を2011年4月からスタートできたのも画期的なことです。

【日吉自然栽培農園】
開拓から種まき、定植など木村式自然栽培法で

前野　木村さんとの出会いもありますが、最初のきっかけはアグリゼミの北海道視察です。由仁の三田村農園へ行った時に、志のある人たちがプロに指導を受けると、一年で畑を作ることができるということを知り、視察ばかりではなく自分達でやらなければいけないと思ったのが始まりですね。

林　前野先生がリーダー役となって、3月、4月はまさに開墾の日々でした（笑）。また、農園を持とうとしたことで、SDM以外の先生達との繋がりもできましたね。

前野　生物学教室の先生たち、地域活性化とか町づくりに興味のある先生方、それからスローフード倶楽部という農業や食に興味を持つ学生の団体との交流も始まりました。農園がきっかけで、人々との交流が始まるということを体験しました。本当に面白かったですね。

東北視察で得たもの

林　過去3年間は、北海道の農業視察でしたが、今年は木村さんの所で自然栽培農園を研究したい、さらに震災のこともあり、初めて東北視察に出かけましたが、これも実り多いツアーになりました。青森県弘前では木村さんの青空塾に参加する事ができ、たくさんの出会いもありました。またお米を持続的に栽培できる方法としてがんばっている宮城県大崎市鳴子温泉の「鳴子の米プロジェクト」を視察して、学生達も感激をするほどの聞き取り調査ができました。地元の農家、温泉、さらに役場の人達が結集したからこそ可能になっているのだと、現地で強く感じました。

【東北視察】宮城県大崎市鳴子温泉にて

前野　やはり、情熱のある人達が集まると、小さな動きから始めても、ちゃんとシステムになっていくんですね。地域活性化というのは素晴らしいと思いました。

林　視察とワークショップをした山形県最上町の人達も本当に喜んでくれました。交流会の場で、高橋町長さんが「慶應の学生に期待しているよ」とおっしゃってくれたこともあって、学生達はその後、夜2時、3時までワークショップの準備をしていました。

前野　現地でもそうですし、行く前も相当徹夜に近い状態でやっていましたからね。

林　そして当日、町のお母さん達にワークショップをどういう風にやるのかを学生達が寸劇で演じてくれて、町の人達も「これなら私たちも話せる」と思われたようで、ワークショップもどんどん白熱していき、良い提案をまとめる事ができました。［詳細は5ページ］

前野　今回は地元の人、東京から行った学生、両方の意見が、ちゃんとかみあったからこそ、あのアイデアが出たんですよ。最上町の魅力というものを学生達は感じ、それに触発されて最上町の人達がまた、問題点や意見を言う。必修科目「デザインプロジェクト」※などで教えていることの素晴らしい実践ができ非常に嬉しく思っています。SDMができてから4年目ですが、非常にうまく回ってきているということを実感しています。その代表例のひとつがアグリゼミです。

日吉自然栽培農園と木村氏との交流

林　嬉しいことですね。その推進力を是非生かしていきたいと思います。ところで日吉の自然栽培農園で収穫をしたものを、石川県羽咋（はくい）市で行なわれた全国自然栽培フェアで出展しました。参加なさって、いかがでしたか。

前野　我々の大学が小さな農園をやっているということに興味を持っていただいて、かなり素晴らしい交流ができたと思っています。私も自然栽培のものをたくさん食べましたが、本当に美味しくて。これからはやはり自然で美味しくて、やっている人達が幸せになる農業だと思いました。

【羽咋市全国自然栽培フェア】
慶應SDMのブース

林　普通の農業は、肥料も農薬も使うというパターンが多いんですが、木村式の場合は無肥料、無農薬できちんと収穫できる画期的な農法です。日吉の場合は日当たりなど悪条件の中での栽培でしたが、それなりの収穫もあり、農家の方たちはビックリなさっていたんじゃありませんか。

前野　ビックリされていらっしゃいました。私たちは自然栽培を科学として定量的に計ろうとしているんです。そこが非常に共感を得たわけです。システムとして明らかにする学問としての動き、生産という動き、ビジネスとしてちゃんと成り立たせる動き。それらを連携させようということに対し応援の言葉をたくさんいただいたことが、最も嬉しくやる気が高まった点です。

進学を目指す学生へのメッセージ

林　是非、日吉の自然栽培農園を後輩達に引き継いでいきたいですし、また、木村さんとの研究もいい形で繋げていきたいですね。これからSDMへ進学をめざす学生の皆さんへメッセージをお願いします。

前野　実はSDMという大学院を設計した時にはもう少し技術系が多いんじゃないかと思っていたんですが、農業や地域のことをやりたい人が予想以上に増えてきていると感じます。専門は何であれ、システムとして物事を考えて、世の中の大きな問題を解決したい。そういう強い志と熱意を持ち、人と人との繋がりに共感する人達に、ぜひ入ってきていただきたいと思います。

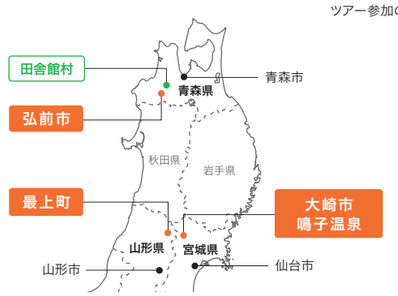
※**デザインプロジェクト** —— 慶應義塾大学、マサチューセッツ工科大学（MIT）、スタンフォード大学およびデルフト工科大学（オランダ）の連携で開発されたシステムデザイン・マネジメント技法を用いて、プロダクトやサービスなどの革新的なシステムをデザインし提言することを目指したプロジェクト。
プロジェクトテーマに関連するプロダクトあるいはサービスについて、問題の定義、利害関係者の要求の把握からはじまり、システム要求の定義、概念設計、アーキテクチャを提案し、試行を繰り返しながら、その検証を行なう。デザインプロジェクトに参加する者は、これまでにないビジネスモデルやイノベーティブなシステムをデザインするための実学を身につけることができる。

AGRIゼミ

東北視察 3泊4日

ツアー参加の学生と関係者

東北［青森・宮城・山形］の「農ある地域」を訪ね、農村の今とこれからを共に考える。



今年で4回目となる慶應義塾大学大学院SDM研究科アグリゼミの農業視察は、8月27日〜30日の4日間の日程で実施しました。修士1年6名、2年2名の学生と、博士課程・研究生各1名、計10名による東北3県を縦断する農業視察です。

初日は、青森県弘前市の成田農園にて「木村塾」を聴講。講師の木村秋則さんは、周囲や業界の誰もが無理だと指摘した無肥料・無農薬リンゴ栽培に成功し「奇跡のリンゴ」を世に知らしめ、今なお自然農法を実践し続ける第一人者です。

2日目は、田舎館村の「田んぼアート」を見学後、宮城県へ移動。午後には大崎市鳴子温泉郷にある「山ふところの宿みやま」に到着。「鳴子の米プロジェクト」について、宿主の板垣幸寿さん、プロジェクト理事長の上野健夫さん、市の農林振興課の安部祐輝さんから、プロジェクトの発足経緯から現在の活動までをヒアリング。米づくりを通した地域の熱い思いに触れることができました。

3日目の午前中は、鳴子の米プロジェクトに参加する農家のお一人、後藤錦信さんの棚田を視察。山ふところに抱かれるようにたたずむ棚田景観は、代々受け継がれてきた農地の重みをたたえ、日本の原風景ともいえる美しさが印象的でした。

午後には、山形県最上町入り。農産物と農産加工品の販売・予約制の蕎麦屋を運営しているグループ「みつわ会」を訪問。その活動をヒアリングした昼食後は、2班に分かれ「最上町お宝発見ツアー」へ出発です。班は「観光資源班」と「食品資源班」の2グループ。地域の人々とは異なった視点で「お宝」を探し、地域活性化につながる提案をさせていただく試みです。

最終日4日目は、前日の「お宝発見ツアー」の総まとめ。午前は、ワークショップ手法のレクチャーとして、学生たちによるブレインストーミングの実演、KJ法の紹介の後、地元の方たちを交えての交流ワークショップを実施。午後からは各班を代表して学生2人1組がプレゼンテーションで熱弁をふるいました。地域の方、役場の方々からの講評をいただいたところ、観光資源班のプレゼン「若者を鍛えるツアー」に絶賛の声があがり、ツアー実施が決定。

今回の視察の目的のひとつでもあった「地域への恩返し」が期せずして交流の場で結実したことは、「農村と都市の共生による地域再生」をテーマに研究している学生たちにとって大変貴重な経験でもありました。この「結果」をさらなる研究へつなげたいと、「若者を鍛えるツアー」参加のために学生たちが再度最上町を訪問。ツアー検証もまた「成果」という大きな実りのひとつであったといえます。

今回の東北視察では、下記の皆様から多くのご協力を頂きました。成田農園の成田陽一さん、木村興農社の木村秋則さん、「山ふところの宿みやま」の板垣幸寿さん、最上町町長の高橋重美さん、最上町役場のみなさん、最上町絆大使で弁護士の松田純一さん、誠にありがとうございました。

視察の成果に手応えも

山形県最上町視察では、山形新聞・NHK山形放送局等の取材が入り、メディアで視察の様子や学生たちへのインタビューが即日紹介されました。また、SDMニュース2011年9月号にもトピックスとして視察報告が掲載されています。

「若者を鍛えるツアー」

高齢者世帯のボランティア除雪＋青年たちが真冬に無病息災を祈願する赤倉温泉のお柴灯（さいとう）祭りを組み合わせた、体験型の冬期観光企画。参加後、最上町に報告書を提出。

◀ 2012年1月14・15日、再度最上町を訪問。

8/27

弘前市

木村式自然栽培農法

成田農園は木村式自然栽培農法を実践する農家で、農園主の成田陽一さんは「奇跡のリンゴ」の木村さんと同様、栽培技術を広めるための地道な活動を継続的に実施されています。当日開催された「木村塾」では、日吉キャンパスに開設されているアグリゼミの木村式自然栽培農園へ木村さんより直々に応援メッセージをいただき、さらに雑草の中でたくましく育つ野菜を目の当たりにし、一同感動。大地という教科書を開いての畑での勉強会は、自然栽培農法の詳細と実際に触れることのできた意義ある一日でした。

木村 秋則氏

1949（昭和24）年生まれ。10年近くにわたる栽培方法の改良の末、それまで不可能とされていた無農薬・無肥料のリンゴ栽培に成功した「奇跡のリンゴ」の生みの親。株式会社木村興農社代表取締役。『自然栽培ひとすじに―無農薬・無肥料の技と心／創森社』ほか著書多数。

8/28

田んぼアート

1993年から開催されている田舎館（いなかだて）村の名物イベント。2011年は「竹取物語」をテーマに、7色の稲で図柄を表現。

大崎市
鳴子温泉

鳴子の米プロジェクト

2006年から国の農業政策が大きく転換、小規模農家への支援が限定され、山間部の鳴子温泉地区も危機的状況に立たされました。そのような中で“地域の農を、作る人と食べる人がつながり、支え合う”しくみがスタート。NPO法人「鳴子の米プロジェクト」理事長、上野さんによるレクチャーで、米プロジェクトの活動がアグリツーリズムを牽引し、まちづくりへ波及する原動力にもなっていること、さらに今後の展望についても知見を得ることができました。

8/29

最上町

山間地の棚田

米プロジェクトのメンバーのひとり、後藤錦信さんの棚田を視察。日本の原風景は、地域の支え合いによって守られています。

最上町お宝発見ツアー

「白川みつわ会」蕎麦料理

山形県最上町の「白川みつわ会」は、旧保育園の建物を活用しながら地域振興に取り組む農業者グループ。農産物・農産加工品販売のほか「そば畑オーナー」「そば打ち体験」など、地域交流活動も積極的に行っています。

最上町お宝発見ツアー

地域の人とは違う目線でまちを探り、新たな魅力を見出そうという試み。デジカメを手にする眼差しも、視察先で耳を傾ける姿も真剣そのものの学生たちでした。

観光資源班

赤倉温泉、日本一の大アカマツなど自然が形成した宝に触れ、健康・医療の複合施設ウエルネスプラザ、白川ダム周辺の雄大な景観も視察。

食品資源班

「白川みつわ会」のヒアリングの後、食品加工会社、アスパラガス農場、道の駅ならぬ川の駅「ヤナ茶屋もがみ」を視察。

8/30

最上町お宝発見ツアー

公開ワークショップ

地域の方を交えてのワークショップでは、2班とも活発な提案・意見交換で盛り上がり、予定の2時間はまたたく間に経過。午後からのプレゼンで観光資源班が提案した**「若者を鍛えるツアー」**が地域の方から高い評価を得、町は実施を決定するという大きな成果を得ることができました。

アグリゼミ学生レポート

切磋琢磨した2年間を終え社会に羽ばたくゼミ生と、現役のゼミ生をご紹介します。

Next leader from AGRI semi

SDM System Design and Management

問題を多視点から捉え、様々な立場から考える力

修士課程2年

石黒 亜貴
Aki ISHIGURO

私はSDMで、授業やゼミを通して、社会問題の要求を多視点で捉える大切さと、同世代や社会人学生の方とのグループワークなどの交流を通して、社会が抱える様々な問題を意識する大切さを学びました。

特にアグリゼミでの視察では、今まではあまり意識したことのなかった、日本農業の課題やその課題に取り組む人たちの姿勢に直に触れる、貴重な体験となりました。また、研究題材の取り巻く環境を見たり、聞いたりすることで、文献などでは得られない知識を得ることができました。

社会人経験がある学生も多い中、学部を卒業してすぐ入学した私に、問題を多視点から捉え、様々な立場から考える大切さを教えてくれました。

修了後は、企業に就職する予定ですが、SDMで学んだ問題を「多視点で捉える力」を活かし、多くの人がより安心で、快適な生活をおくれる社会づくりに、精力的に取り組んでいきたいと思います。

■修論研究

バイオガスプラントの副生成物である消化液を利用して、美味しいコマツナを作る方法に関して

『木を見て森も見る』SDMの実践

修士課程2年

庄子 達也
Tatsuya SYOJI

アグリゼミでは、農業の魅力、奥深さ、厳しさ、難しさ、農業を通じた地域活性化、そして農村と都市の共生の考え方を学ぶことができました。最も印象的な活動として、11年春に始めたSDM日吉自然栽培園の開墾作業では、周囲のみなさんの多大な協力のもと、開墾や収穫に関しての経験だけではなく、挑戦することの大切さと、ゼロから創りだすことの喜びも実体験することができました。

このようにSDMの2年間は、実際の現場と理論を共に学ぶことで深い理解を得ることができる貴重な時間でした。また多くの仲間との出会いもかけがえのない財産になりました。

SDMには様々な実践プログラムがありますが、私にとってアグリゼミはまさに「木を見て森も見る」システムデザイン・マネジメントの実践の場だったと思います。ここで学んだことを、一社会人として実社会の中で実践し、よりよい社会創りに役立てたいと思います。

■修論研究

国産農作物の安心・安全に資するGAP（農業生産工程管理）普及方法の提案

木村式自然栽培の研究と実践

修士課程2年

本山 憲誠
Kensei MOTOYAMA

近代農業は農薬と肥料によって大量生産、安定収量、作物の均一化に成功した。そのような「農業の工業化」は時代の要請であり、世界の人口増加を支えてきた。しかし、私は農業の近代化によって懸念される健康被害や環境破壊に警鐘を鳴らすべく、「木村式自然栽培」の研究を行った。

アグリゼミ生と共に、日吉キャンパスの雑木林を開拓し、自然栽培による農作物生産に挑戦した。ゼミ合宿として青森県、石川県にて、自然栽培の技術習得や実践農家へのインタビュー、消費者へのアンケートなどを行った。真夏の農作業、雨中のアンケートなどゼミ生の仲間たちには大変お世話になった。

これからも日吉SDM農園における「土作り」や「自家採種」など課題は多く残っている。さらにSDMとアグリゼミで学び、研究したビジネスモデルの実践にも期待が集まっている。ますますアグリゼミにお世話になりそうである。

■修論研究

木村式自然栽培による新規就農システムデザイン
―中高年失業者と耕作放棄地の再生モデル―

■ 研究員 ■

CSAの普及と様々な分野への応用を

村瀬 博昭
Hiroaki MURASE

2011年9月
博士（学術）取得

農業の経営手法であるCSA（Community Supported Agriculture）の魅力をより多くの人に理解していただき、日本に普及させるための活動をこれまで実施してきました。CSAは実践することで単に農場経営が良くなるだけでなく、地域活性化につながる取組も推進されます。今後は研究成果を活かして、CSAの一層の普及のほか、様々な分野に応用したいと考えています。また、農業は情報通信技術があまり活かされていないので、CSAと併せて効果的な活用方法を研究したいと考えています。

■博士論文について

論文名：「地域活性化に資するCSA（Community Supported Agriculture）のモデル化」
地域活性化に資するCSAのモデル化について研究を実施。モデル化することで、農家が効果の高い取組を安定的に実践できると考えています。

アグリゼミは貴重な研究・実学の場

松尾 康弘
Yasuhiro MATSUO

SDMでは大規模複雑系な社会システムをどのようにデザインするかを学び、それをアグリゼミで農業という社会システムに適用することで、自身の研究テーマである「都会での農業」についての一定の解を得る事が出来ました。今後は、それを実践し検証しながら、「実学」として学んでいきたいと考えています。単に教科書などで学ぶだけでなく、実際の現場を見て聞いて議論し、実践してフィードバックを得られるアグリゼミは貴重な研究・実学の場です。

■起業した事業について

［アーバンファームファクトリー株式会社］
都会で農に触れる機会を提供することを目的とした、水耕栽培機器の販売、植物工場のコンサル、卓上型植物工場のレンタル事業など

フランス留学で得た情報を活かしたい

修士課程1年

市川 愛
Megumi ICHIKAWA

アグリゼミは、いつも和気あいあいとした雰囲気です。しかしプロジェクトが始まると知恵を出し合い、時に議論しながらベストの結果に向けて協力して作業をしていきます。学生には社会人経験もある人もいて、学部にはない環境ですが、発言しやすい雰囲気もあり、自分を成長させられるそんな場所だと思います。今後は、半年間フランス留学で集めた農業の情報をみんなで共有し、より良い農業のあり方について議論していきたいと思います。

自分の様々な経験が活かせる環境

修士課程1年

岡本 美紀
Miki OKAMOTO

私は趣味である登山で農村を訪れたり、若者中心の農業体験に参加した経験を通して、農村に魅力を感じていましたが、アグリゼミに入るまで、農業について学術的には考えたことはありませんでした。初めは不安もありましたが、アグリゼミは、「農業を取り巻く環境はどうあるべきか？」を、様々な視点から実践を通して考えていく場所なのです。自分の経験を活かして、農業について出来ることを日々ゼミ仲間と考え、刺激し合っています。

理論だけでは終わらず実践まで

修士課程1年

菅家 元志
Motoshi KANKE

アグリゼミでは、様々な地域に密着して、その地域が活性化するために行われている「まちづくり」や「観光政策」、「地域マーケティング戦略」などを、実際の現場で、地域の人の思いを肌で感じながら学ぶことが出来ます。さらにはフィールドワークだけではなく、実際にその地域活性化のソリューションを提案していく機会もあります。この理論だけでは終わらず実践まで体験出来る環境こそが、アグリゼミの特徴であり、魅力だと私は考えます。

アグリ「最先端」の現場に触れる

修士課程1年

櫻井 崇仁
Takahito SAKURAI

私は今年のアグリゼミ視察で白石農園（東京都）や、木村式自然栽培農園フェア（石川県）へ参加することが出来ました。白石農園では、市民農園の新しい存在価値に触れ、さらに東京で農業ができるということに驚きを隠せませんでした。木村式自然栽培農園フェアでは、全国の農家の方々とお話しさせていただき、全国で「自然栽培」が1つの流れになっていることも知りました。今後もゼミにてアグリ「最先端」の現場に触れ、学んでいきたいと思います。

インスピレーションをもらえる場所

修士課程1年

鈴木 重央
Shigeo SUZUKI

アグリゼミの活動で共通して言えるのは、どの活動も思いがけない気づきを与えてくれたということです。いろいろな方に出会い、お話を聞き、普段は目にしないものを見る。後から自分なりに理論的な考察を加える。すると新しい視点や発想に辿りつくことがあります。きっとそれは農業という人間の原初的な営みが持つ普遍性なのだと考えています。アグリゼミは農業の現場で、五感をフルに使ってインスピレーションをもらえる場所だと思います。

五感をフル活用して学ぶアグリゼミ

修士課程1年

堀田 佳江
Yoshie HOTTA

アグリゼミの活動は、四季を体感できます。夏の東北視察では、地域の取り組みを学びました。地元の方々との交流がとても印象的で、特におばあちゃん特製の手作りごはんの味は忘れられません。食材の旬と温もりを感じました。本で得た知識と実体験は全く違います。五感をフル活用して学ぶことができるのが、アグリゼミの特徴だと思います。今後は、アグリゼミでの学びを活かして、現地の生の声を大切にできる修士論文を書いていきたいです。

農業は田舎の大切な資源のひとつ

修士課程1年

森 崇
Takashi MORI

農村と都市の共生や、農業を使った地域活性化に興味があり、ゼミに参加しています。田舎にある資源を考えた時に、農業も田舎の資源のひとつと捉えることができると思います。そのような資源をどのように活用して、人や経済の流れを作っていくのかを研究したいと思っています。ゼミの印象としては、様々な立場の人が活発に議論していて、ワイワイやりながらも、最後には結論が出ている。このメリハリがゼミの特徴ではないでしょうか。

多角的なアプローチのゼミ

修士課程1年

横山 大悟
Daigo YOKOYAMA

アグリゼミの活動の印象ですが、学部時代に農学を学んでいた私にとっても充実した内容だと感じています。学部時代、農学という単一のアプローチからの研究しかおこなってこなかった私にとって、毎回のゼミで各学生が社会学、経営学など多角的なアプローチから、農業の発展に関するテーマを持ち込み、議論するアグリゼミの研究環境は大変刺激的です。また、社会人など様々な経験を持つ学生も在籍しているので、得られるものも多いと考えています。

2011年度 アグリゼミメンバーによる 論文・講演論文並びに受賞

SDM研究科アグリゼミメンバーの研究・社会活動の一部を紹介します。

受賞

修士1年の菅家元志君が設立し、代表をつとめる福島復興支援団体「Link with ふくしま」が、「日本復興を考える学生会議」大賞を受賞。「Link with ふくしま」は、「福島を未来型社会創造地域へ」というビジョンを掲げ、福島県内だけでなく県外・国外のステークホルダーを繋げ、復興を加速させるための活動をしている。

論文・講演論文

■鈴木重央・堀田佳江・林美香子・白坂成功
「商店街活性化における市民参加型価値づくり―商店主・顧客の非経済的インタラクションの数量分析―」
社会・経済システム学会第30回大会報告要旨集 2011年10月

■岡本美紀・鈴木重央・津々木晶子・保井俊之
「価値協創型システムの構造分析―遊園地における要素間価値協創過程の数量分析を事例として―」
社会・経済システム学会第30回大会報告要旨集 2011年10月

■村瀬博昭
「災害復興へのCSA（Community Supported Agriculture）の活用―消費者による地域づくり―」
日本都市学会第58回大会報告要旨集 2011年11月

■牧野由梨恵・白坂成功・牧野泰才・前野隆司
「欲求連鎖分析（人々の欲求の多様性を考慮した社会システムの分析・設計手法）」
日本機械学会論文集C編 2012年1月

■Hiroaki Murase, Takashi Maeno and Kiyohiko Sakamoto
Factors for Transition towards Community Supported Agriculture (CSA) in Japan, The International Journal of Environmental, Cultural, Economic and Social Sustainability, Vol. 7, No. 5, 2012年1月, pp. 199-214